

開催地名	東京都町田市
開催日時	令和5年8月29日（火） 14：00 ～ 15：30
開催場所	町田市役所3階会議室
語り部	菊池 のどか （岩手県釜石市）
参加者	市民、職員 34名
開催経緯	町田市では、市内小中学校における防災教育をすすめており、地域の自主防災組織が講師役となり、資器材の操作方法を教えたり、避難施設での生活について伝える取り組みが広がりつつある。ただ、子育て世代等への発信がまだまだ必要であり、いかに地域や学校と連携して防災に取組みかが課題となっている。
内容	（1）東日本大震災 故郷で何を思い浮かべるか。育ったところ、海のにおい、山の雲がかかった風景、また場所ではなく、人の事を思い浮かべたりもする。故郷：岩手県釜石市は東日本大震災で大きく変貌した。行きに通った通学路が、見る影もなく、帰る道がなくなっていた。 中学校の卒業式2日前に震災。卒業式前なので通常なら早めの帰宅だが、歌の練習をしていなかった事で、クラス全員で居残り練習をすることになった。練習が終わり、電話ボックスで母に迎えを頼む電話をかけた時に地震が発生した。地面が揺れ出し、立っていられなくなった。2メートル離れている友達と話せないぐらいの山鳴り、桜並木が振り子のように揺れていた。終わらないのでないかという長い揺れだった。避難訓練通り、友達と点呼場所へ行ったが、先生から「点呼をとるな、はやく走れ」と言われた。避難訓練だと隣接する小学校の児童と手を繋いで避難するが、小学生が出てこず、待つべきか置いていくか悩んだ。「走れ」「出てこい」「逃げろ」と各々叫びながら走った。ございしょの里という避難場所に移動し、ここで点呼を取り、小学生含め、児童生徒全員の無事が確認された。地域の人たちを含めると800名程避難していた。そして更なる高台の避難場所、やまぎきデイサービスに移動することとなり、小学3年生の男の子と手を繋いで避難した。逃げる歩行者での渋滞、そして海に向かう車も避難経路を塞いだ。海に向かう車は児童生徒の保護者である。子供の安否が心配で迎えに行こうとしていた。小中学校では防災学習があり、山へ逃げる意識は強かったが、家庭との防災意識の共通がなかった結果である。ある地域では、海に向かったため、命を落としてしまった人もいた。やまぎきデイサービスの坂道を上ると、津波が後ろに迫っていた。私は最後尾だった。津波は白い砂埃みたいな煙を上げていて怖かったが、小学生の手前、怖さを表に出せなかった。またヘリコプターの騒音と地鳴、強音に包まれ、まっすぐ立っていられない程だった。そしてドブの様な、魚が腐った様な津波の匂い。息を吸うこと自体も辛

かった。怖い・悲しいとは思わず、死にたくないと思った。備蓄も何もない3月の山はとて寒く、そして痛い。言葉も出てこなくなる。マフラーを伸ばして8名で共有したりもした。そして日も暮れ、9キロ離れた町の避難所まで歩いていくことになった。途中、消防団の人たちが無線で連絡を取り、トラックドライバーが迎えに来てくれた。トラックの荷台に児童生徒は乗り、町の避難所に向かった。避難所に行けばどうにかなると思っていたが、溢れかえる人ばかり、避難所の中は大混乱。小中学生は空気を読んで静かにしなければならない、そんな雰囲気だった。

(2) 進学状況

ラジオで高校の全員合格を知った。そして自転車が高価なモノとなり、自転車泥棒、サドル盗難事件、普通ではあり得ないことが起こっていた。沿岸部出身でなかった為、避難所生活でなかったが、避難所生活の学生は更に大変だった。弁当を持参出来ないの、5月ぐらいまでは午前中授業、また避難所の消灯時間で宿題が出来なく、学校を開放したりなどして対応をした。また保護者を亡くしたり、家庭環境が複雑になったり、就学困難となった生徒も多かった。進路も即戦力の中途採用はあるが、教える時間もないので新卒採用は控えている企業ばかりだった。どうせ将来は来ないと悲観的になり、また就学困難になった人を見ると、大学に行きたいとはなかなか言い出せなかった。高校時代は色々な事を考えていた。心配されなくなかった。そんな中、助けてもらった防災教育を続けていきたいと強く思うようになった。

(3) 釜石東中学校での震災前の取り組み

震災前 2004 年から釜石市で取り組みが始まったが、最初は大人に対しての教育で、なかなか広がっていかず、次世代の大人、子供たちへの学校防災にシフトにしていった。最初は単発イベントが多かったが、授業の最後の5分での防災学習を行うことになり、防災が親しみやすくなった。また修学旅行でも釜石市では体験できない防災館などで学習もした。先生も同じことをして、失敗している姿を見た。失敗することは悪いことではない、出来るようになればいい。失敗しても知っていたら支援者になれる可能性がある」と学び、意識が変わっていった。安否札では地元の高齢者の「逃げない→逃げられない→逃げたいけど逃げられない」と言う本音を知ることができ、雨の日・雪の日・高齢者・幼児などの想定で行ったフィールドワークで沢山の視点を学べた。防災担当教員の申し送りも1→3名に変え、教師主導→生徒会主導とし、地域との連携も取りやすくなり、防災活動の継続するために工夫を行っている。

	(4) 最後に もっと早い段階で真剣に防災活動に取り組めばとよかったと感じている。災害にあったときに、大事な人がしっかり逃げていることがわかる、そんな信頼関係を築ける防災活動が大切である。また市民全員が同じ防災意識を持つことは難しいが、防災を日常化にし、毎日丁寧な生活を送る（靴を揃える、服を準備して寝るなど）、そんなことから始める防災活動も行ってみて欲しい。  
開催地より	1分1秒の中で、判断をするためには、事前に学び、情報を「知っておく」ことが大切であることがわかった。自然災害が起きた後、いかに大切な人の命を守るかは、自分次第であることが伝わった。